

和魂漢才

やまとごころとからせむ



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

設立35周年記念展覧会

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都・
東アジア



の考古学

2015.11～2016.1

京都府・京都文化博物館・京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

ご あ い さ つ

日本列島を舞台にして芽ばえ、そして発展してきた文化は、東アジアのなかでのさまざまな交流により、個性あふれるものとなりました。交流によってもたらされた有形・無形の文化は、さらに先人の知恵と工夫が積み重ねられて、日本に定着してきました。

紫式部は、『源氏物語』乙女の巻で「才を本としてこそ、大和魂の世に用いられる方も強う侍らめ」と表し、渡来の文化「漢才」をもとに、「和魂」つまり日本の教養や判断力は強くなっていくということを記しています。このような考え方は、『今昔物語』、『大鏡』において、「和魂漢才」と表現されるにいたっています。

今回の展示は、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター設立 35 周年記念事業として、我が国の文化形成と東アジアとの交流史を、京都府内の出土品でたどる試みです。過去の歴史をふりかえり、我が国と東アジアの現在と未来を考えていただく機会になりましたら幸いに存じます。

本展の開催にあたり、協力いただいた京都府、京都文化博物館、京都府教育委員会、並びに貴重な文化財を御出品いただいた諸機関、御指導・御協力を賜りました関係者の皆様に心から厚くお礼申し上げます。

平成 27 年 11 月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 上 田 正 昭

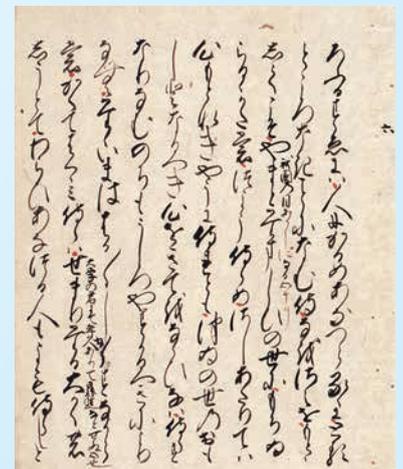
凡 例

1. 本図録は、平成 27 年 11 月 28 日（土）から平成 28 年 1 月 11 日（月・祝）まで、京都文化博物館で開催する公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター設立 35 周年記念展覧会『和魂漢才－京都・東アジア交流の考古学－』の展示図録である。
2. 記念展覧会は、京都府、京都文化博物館、京都府教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが共催で実施するものである。
3. 本図録に掲載した資料は展示品のすべてではない。また、展示の都合により員数等が異なる場合がある。
4. 本展覧会にかかる資料調査、図録作成、展示資料及び写真等の借用にあたっては次の機関から御指導・御協力を受けた。

（順不同・敬称略） 京丹後市久美浜町芦原区・公益財団法人古代学協会・国立国会図書館・東京国立博物館・神戸市立博物館・堺市立博物館・高槻市教育委員会・京丹後市教育委員会・宮津市教育委員会・舞鶴市教育委員会・福知山市教育委員会・綾部市教育委員会・京丹波町教育委員会・南丹市教育委員会・南丹市立文化博物館・亀岡市教育委員会・亀岡市文化資料館・京都市文化財保護課・京都市歴史資料館・京都市考古資料館・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所・向日市教育委員会・向日市文化資料館・長岡京市教育委員会・公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター・宇治市教育委員会・宇治市歴史資料館・城陽市教育委員会・久御山町教育委員会・八幡市教育委員会・木津川市教育委員会・木津川市立恭仁小学校

5. 本図録の掲載写真は、当調査研究センター撮影のもののほかは、上記の各教育委員会及び各機関所蔵のものである。

6. 写真を掲載した展示品の指定区分は、◎重要文化財、○府指定文化財である。



『源氏物語』 乙女の巻
（公益財団法人古代学協会提供）

日本文化の源流

今から3万5千年以上前の旧石器時代に、動物を追って大陸から日本列島に人が移り住みました。縄文時代には、人々は狩猟や採集を生業として生活しており、日本列島の地域ごとに造形に優れた縄文土器が作られました。弥生時代に入ると大陸から多くの技術がもたらされました。本格的な稲作もその1つで、水田や灌漑施設が造られて、ムラが各地に形成されました。

こうした技術は知識だけが日本にもたらされたのではなく、技術を持った多くの渡来人が移り住んだ結果であることがわかっています。

朝鮮半島起源の石器

縄文時代の石器

縄文時代にはシカやイノシシを仕留めるための石鏃や石槍、切断加工に用いられた石匙、ドングリなどを粉砕する磨り石や石皿などが主要な道具でした。

弥生時代の石器

弥生時代に入ると朝鮮半島に起源を持つ大陸系磨製石器と呼ばれる、石を磨いて作られた大型の石器が日本列島にもたらされ、石器の種類や用途が縄文時代とは大きく変化しました。

磨製石器は、使用のたびに磨かれて形を変えていきますが、京丹後市芦原遺跡の石器は使われた形跡がなく、本来の姿をとどめる貴重な遺物です。



大陸系磨製石器（京丹後市芦原遺跡）

遠距離航海の証人・黒曜石

日本各地では、亀岡市鹿谷遺跡出土の石槍など、島根県隠岐島から運ばれた黒曜石で作られた石器が出土します。本州から隠岐島までの距離は約50kmもあり、この距離は九州から島伝いに朝鮮半島へ行く距離に相当します。

隠岐島の黒曜石が本州で出土することは、縄文時代の人々が遠いところまで航海する技術を持っていたことを示しています。

くらしの変化



縄文時代晩期の土器（深鉢）
（大山崎町下植野南遺跡）



弥生時代前期の土器（壺）
（長岡京市雲宮遺跡）

縄文土器から弥生土器へ

縄文時代晩期に北部九州に伝わった稲作文化は徐々に近畿地方にも広がり、狩猟・漁労・採集の生活から稲作を中心とする生活に変わりました。弥生時代の始まりです。

それに伴って土器も、種籾貯蔵用の壺の出土が増え、食物を盛るための高杯が登場します。深鉢・浅鉢が中心であった縄文土器から土器の構成も大きく変わりました。

縄文のまつり



石棒（京田辺市新遺跡）

縄文時代には、石棒や石冠などの石製品が出現します。これらの石製品は、実用品ではなく、まつりに用いられたと考えられています。中でも男性器をかたどった石棒は縄文時代前期から見られ、中期には50cmを越すような大型のものも作られました。石棒を用いたまつりは子孫繁栄や自然の恵みを祈願したと考えられます。

また、日本列島全域で出土する翡翠製の**大珠**（おおだま）は、首から下げて、呪術のために用いられ、権威の象徴として所有していたとされています。

弥生のまつり

弥生時代のまつりに使われた代表的な道具として銅鐸があります。朝鮮式小銅鐸をモデルに日本風に発展させたもので、初期のものはつるして打ち鳴らすものであったと考えられています。その後、銅鐸は徐々に大型化し、やがて「聞く」銅鐸から「見る」銅鐸へと変化していきます。

銅鐸は豊穡祈念の祭器と考えられています。



○銅鐸（京都市梅ヶ畑出土）

戦いの始まり

戦いに備えるムラ

縄文時代のムラは、敵に対して防御施設を持ちませんでした。弥生時代に入るとムラを取り囲む大きな溝が掘られます。こうしたムラを環濠集落といます。防御用の溝でムラを囲うのは、大陸からもたらされた生活様式で、稲作によって生まれた貯蔵米を外敵から護るために設けられたとされています。

武器の出現と犠牲者

本格的な稲作の開始に伴い、人々は土地や水をめぐって争うようになり、ムラどうしの争いを繰り返し、次第に大きなクニへとまとまってきました。

人を殺めることは縄文時代にもありましたが、弥生時代には、より殺傷能力の高い**剣・矛・戈**という新しい武器や青銅製の**鏃**が戦いに用いられました。これらは朝鮮半島から日本にもたらされました。

戦いの犠牲者と考えられる武器の刺さった人骨が西日本を中心に発見されています。京都府でも京都市東土川遺跡から多くの武器が墓の穴から見つかり、戦いの犠牲者と見られます。



ムラを護るための環濠（京都市東土川遺跡）



折れた石剣や石鏃が見つかった墓穴（京都市東土川遺跡）

新しい技術の波

日本列島に古墳が造られた時代、日本は「倭」と呼ばれて、「国」としてのまとまりをなしていきま

きます。当時の朝鮮半島は高句麗、百濟、新羅、伽耶諸国といった「国々」に分かれて、互いに争って

いました。4世紀に倭「国」は朝鮮半島に進出し、これらの「国々」の争いに加わっていきま

きます。朝鮮半島での「国」と「国」との武力衝突が激しくなると、争いを避けて多数の人々が日本に

渡来してきます。これらの人々は、文字や仏教といった知識とともに馬と馬具、武具や須恵器とい

った最新の技術を日本にもたらしました。

威信材としての腕輪

腕輪

古墳時代前期には、石で作られた腕輪が古墳に副葬されます。石釧、車輪石、鋏形石といった腕輪は緑色の石材で製作されました。これらの腕輪は、「倭」の中心であるヤマト王権に加わった首長の証として、中央から配布されたと考えられています。

城陽市史跡芝ヶ原古墳から出土した銅釧は、弥生時代に作られた南方の海でしか採れないカサガイ製の貝釧を忠実に模倣したもので、車輪石の祖形となるものです。南丹市園部垣内古墳の腕輪には、定型化した車輪石と石釧があります。石釧も南方の海でしか採れないイモガイ製の貝輪がその祖形と考えられています。



◎銅釧（城陽市史跡芝ヶ原古墳）
（城陽市教育委員会提供）



◎車輪石（南丹市園部垣内古墳）

武器の変化と馬具の登場

甲冑

古墳時代前期の鉄製甲冑は地板（鉄の板）を重ね合わせて革紐で綴じて製作されます。初期の甲冑の鉄板にはさまざまな形態があり、規格がなかったと考えられます。

古墳時代中期になると、帯金などの甲冑の枠組みを形作る部材が考案され、地板の形態と配置が統一されます。さらに、地板の結合には渡来系の技術である鉸が使用されます。このように甲冑の規格化や製作の簡略化がなされ、結果として、大量生産されるようになりました。

こうした背景には、朝鮮半島周辺の軍事的な緊張による兵器の必要性と大陸の技術を取り入れた高度な鉄の加工技術（鍛冶）の発展があります。



ほうけいばんかわとじたんこう
方形板革綴短甲
（木津川市瓦谷1号墳）



ちやうほうばんかわとじたんこう
長方形板革綴短甲
（南丹市今林6号墳）

武器

古墳時代中期の武器は、前期の武器にくらべ形態が変化し、大量に生産されるようになります。甲冑を身につける敵を倒すために刀剣は長大化します。鉄鏃も多様な形態が出現します。中でも、実戦のため先端が細く鋭く、全長の長い鉄鏃が出現します。これは、矢の飛距離と貫通力を高めるため工夫されたものです。

馬

古墳時代中期に馬が日本列島にやってきました。

馬の登場によって、軍事的な戦術が変化し、人・物の移動、情報の伝達などが迅速になりました。また、馬を飼育するために牧が整備され、馬飼いの人々の集落も出現しました。のちには馬の力を利用した農業生産も行われました。

また、馬に乗り、操るために轡・鞍などの馬具も生産されました。中でも、首長が乗る馬には、金で装飾された辻金具・杏葉などが装着されました。金色の馬具は、鍍金や鋳留めなど、当時の最先端の技術を持った渡来系の技術者が製作したと考えられています。



○鉄鏃（京丹後市奈具岡北1号墳）



○馬具（福知山市奉安塚古墳）



馬形埴輪（木津川市上人ヶ平埴輪窯跡群）

埴輪になった馬

日本列島に馬が入ってくると、馬の形の埴輪が製作されます。馬形埴輪には、馬具が装着された馬と装着されない馬があります。

古墳に副葬された馬具は、木製や革製の部分が腐って残らないため、詳しい形や装着方法など不明な点があります。

しかし、馬形埴輪に表現された馬具と比較することで、形や装着方法を明らかにすることができます。

激動の東アジア

高句麗の『広開土王碑（好太王碑）』の碑文からは、4世紀の終わり頃に、倭国が朝鮮半島南部の支配権を巡って、高句麗や新羅と激しく争っていたことがわかります。

また、『宋書』倭国伝には、朝鮮半島南部における外交・軍事上の立場を有利にするため、倭国が中国の南朝に何度も使者を送ったことが記載されています。

このような東アジアをとりまく状況の中で、倭国は大陸や半島の人々との交流を通じて新たな文物を取り入れ、日本独自の技術や生活を育む土壌が作られました。



古墳時代の東アジア

土器生産の変革

須恵器生産のはじまり

古墳時代前期には、弥生土器の系譜を引く素焼きの土師器を使用していましたが、中期になると朝鮮半島で使用されていた陶質土器に直接の源流をもつ須恵器が登場します。

須恵器は、5世紀初頭頃、朝鮮半島から日本列島へ製作に携わる工人が渡来したことにより、生産が始まったとされています。轆轤の使用と登り窯による焼成という、それまでの土師器生産とは大きく異なる、技術革新が起こります。

轆轤を使用することで規格化された製品の生産が可能となり、登り窯の使用により一度に大量の須恵器が焼けるようになりました。

須恵器の広がり

須恵器生産には、高い技術が必要で、専門の工人しか作ることができませんでした。そのため、当初は生産地が限定されていましたが、6世紀以降は、技術が広がり、各地に窯が作られました。須恵器は、初めは副葬品や祭祀に用いられましたが、その後、日用品として使用されるようになりました。



初期須恵器と韓式系土器（宇治市宇治市街遺跡）
（宇治市教育委員会提供）



登り窯の中に残された須恵器
（京丹後市阿婆田窯跡群）

鏡



◎双頭竜文鏡
（南丹市黒田古墳）



◎三角縁神獣鏡
（南丹市園部垣内古墳）
（南丹市教育委員会提供）



◎八花鏡
（八幡市女谷・荒坂横穴群）



◎水草双鳥鏡
（宮津市エノク経塚群）

鏡の遷り変わり

弥生時代には、中国で作られた鏡が日本にもたらされていました。鏡は各地の大型の墓に副葬されていることから、首長が所有していたと考えられます。

古墳時代になると、鏡は中央の首長から地方の首長へと権威の象徴として分け与えられました。

鏡は、次第に日本国内でも作られるようになり、中小の首長墳に副葬されるようになります。また、デザインも日本独自のものへと変わっていきます。

古代にも中国から鏡が日本へもたらされますが、中世には、宮津市エノク経塚群出土鏡のように、日本独自の文様をもつ「和鏡」が成立します。

卑弥呼の鏡？

三角縁神獣鏡は、縁の断面が三角形の大型の鏡で、背面に古代中国の仙人や神獣の姿が表現されています。中国製か日本製か意見が分かれています。『魏志倭人伝』には、邪馬台国の女王卑弥呼が239年に魏から銅鏡100枚を与えられたという記事があり、三角縁神獣鏡がその鏡であるという説があります。

漢才から和魂へ

古代の日本では、遣隋使^{けんずいし}や遣唐使^{けんとうし}、遣新羅使^{けんしらぎし}など、海外に派遣された使節を通じて、さまざまな知識や文物を取り入れました。その結果、仏教を受け入れ、律令国家^{りつりょうこっか}を建設しました。

このように東アジア世界から持ち込まれた漢字・仏教・律令制などの外来の文化（＝漢才^{からざえ}）が、それまでの在来の文化と融合して、新たな日本的な文化（＝和魂^{やまとこころ}）が形成されました。

「仮名の誕生」に見られるように、日本人は外来の文化をそのまま受け入れ、伝えたのではなく、使いやすいように変えていきました。

仏教の受容とひろがり

仏教の伝来

仏教は、6世紀頃、欽明天皇^{きんめいてんのう}の時代に朝鮮半島の百済^{くだら}から伝わったとされます。京都府内で最も古い寺院の1つに木津川市高麗寺跡^{こまでら}があります。7世紀前半^{こんりゅう}の建立と考えられます。

寺院を造る技術の多くが外来のものでした。また、初期の寺院の屋根を飾る軒瓦^{のきがわら}の文様は、朝鮮半島の国々から大きな影響を受けていました。



奈良県飛鳥寺と同範の軒丸瓦
(木津川市史跡高麗寺跡)



奈良県豊浦寺と同範の軒丸瓦
(宇治市史跡隼上り瓦窯跡)
(宇治市教育委員会提供)



珍しい八角塔の基壇（京都市史跡極原廃寺跡・復元整備後）
(京都市提供)

仏教の普及

仏教の伝来に伴い、全国各地に多くの寺院が建立されました。全国の寺院の数は、7世紀前半に約50か所でしたが、7世紀の終わり頃には600か所ほどあったと伝えられています。

中でも、7世紀後半の建立と考えられている京都市史跡極原廃寺跡^{かたぎはらはいじ}では八角形をした塔の基壇跡^{きだん}が見つかっています。朝鮮半島の高句麗^{こうくり}などに見られる類例の少ない塔の型式です。

蓮華文の広がり

寺院の屋根を飾った軒丸瓦^{のきまるがわら}の文様の多くは蓮華文^{れんげもん}と呼ばれるハスの花を象ったものでした。

京丹後市俵野廃寺^{たわらのはいじ}では、蓮華文の軒丸瓦（右の写真の②・④）のほかに、朝鮮半島の影響を受けた可能性のある軒丸瓦が使用されていました（同①・③）。

蓮華文の軒丸瓦は、寺院だけでなく、都城や官衙の建物の屋根にも飾られるようになり、華やかな蓮華文が日本各地で盛んに用いられました。



地方寺院の軒丸瓦（京丹後市俵野廃寺）

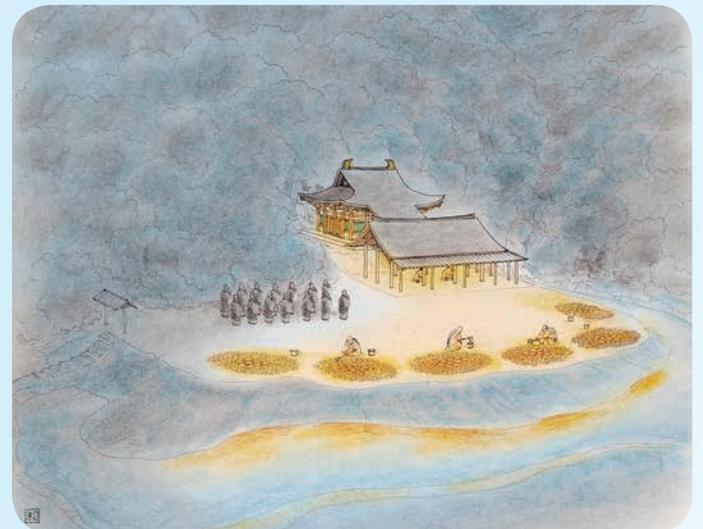
造塔供養の営み

八幡市美濃山廃寺では、ひさご形土製品と呼ぶ一風変わった土製品が出土しています。形状から小型の塔の一部であったことがうかがわれ、仏教の儀式(=法要)で使われたものでしょう。土饅頭形をした覆鉢形土製品と呼ぶものも出土しています。

小さな塔をたくさん造って国家の安寧や長寿、罪業の消滅などを祈る「造塔供養」というものが、新羅などで流行していたことも知られています。



ひさご形土製品 (八幡市美濃山廃寺)



神雄寺における法要の想像復原図 (早川和子氏・画)

神仏習合の寺院

仏教が日本国内に広まると、日本本来の信仰である、自然現象などに宿るとされた「神」と融合していき、「神」と「仏」の関係が渾然一体となっていきます。こうした信仰形態を「神仏習合」といいますが、その具体的な姿として「神」の字を付した寺院が建立されました。

奈良時代の神仏習合の寺院の1つとして、木津川市史跡神雄寺跡(馬場南遺跡)があります。そこでは、大量の灯明皿が川に捨てられており、過ちを悔いる「悔過」法要のようすがわかりました。また、唐三彩の影響を受けた国産の奈良三彩の香炉や壺などとともに、ほかでは例をみない彩釉山水陶器と呼ばれる仏具が出土しています。

唐三彩から奈良三彩へ

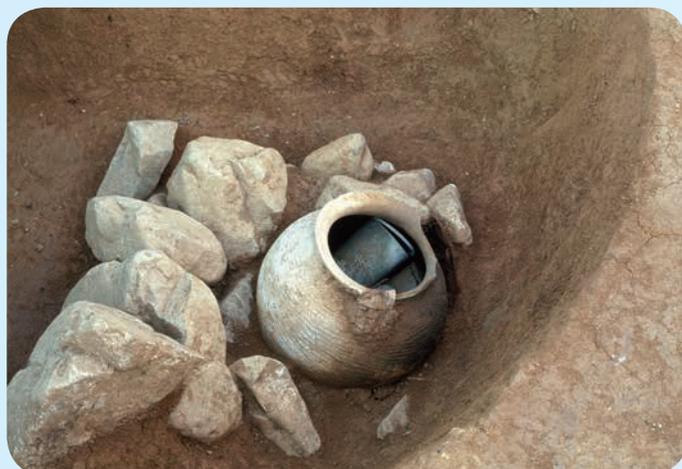
2種類以上の釉薬をかけた焼き物を三彩といいます。唐三彩に憧れた日本人が奈良三彩を生み出しました。奈良三彩は、唐三彩とは異なった器形を選ぶなど、日本人の好みに合わせたものに変化していきました。また、ほかの土器にくらべて鮮やかな彩りに当時の人々は魅了されたことでしょう。



彩釉山水陶器
(木津川市史跡神雄寺跡)



奈良三彩の香炉
(木津川市史跡神雄寺跡)



経筒を納めた須恵器の甕 (福知山市大道寺跡)

末法の仏教

平安時代には、釈迦の教えが正しく行われぬ世が来るという「末法思想」が流行しました。人々は弥勒菩薩が姿を現すという釈迦の教えをはるか後世にまで伝えるために、経典を経筒などの容器に入れて地中に埋納しました。

福知山市大道寺跡では、銅製や竹製の経筒に9巻分の経典が納められていました。

なお、鎌倉・室町時代以降は、死者への追善的な目的も加わり、当初のあり方から変化しました。

みやこの造営とくらし

みやこの造営

6世紀末～7世紀前半に隋・唐によって中国が統一されると、日本も中央集権的な国家を目指しました。中国にならい、律令制を導入し、中国の都城をモデルにした都城の整備が行われました。



恭仁宮の大極殿跡（木津川市史跡恭仁宮跡）

恭仁宮への遷都

京都府には、恭仁宮・長岡京・平安京の3つの都城がありました。

聖武天皇（在位 724～749年）は、天平12（740）年、みやこを平城京から恭仁宮に遷しました。恭仁宮は足かけ5年のみやこでしたが、平城宮から大極殿を移築したことが『続日本紀』の記載や発掘調査の結果、明らかになっています。宮の周囲には、大垣（築地）が造られ、大規模な建物や門の跡なども見つかっています。また、内裏（天皇が儀式を行ったり、日常生活を送る空間でした）に相当する区画が2つあることがわかりました。



古代の都城分布図



恭仁宮跡と同時期の土器（木津川市上粕北遺跡）

恭仁宮をめぐる遺跡

恭仁宮から南西約4.5kmに所在する木津川市上粕北遺跡では、恭仁宮と同時期の土器とともに「讃岐国」と書かれた木簡などが見つかりました。また、全長100m以上の直線の溝や掘立柱建物なども見つかり、恭仁宮が造営されたころの周辺の様相を示しています。

新しい文物

絞胎陶枕は、唐で作られた陶製の枕です。絞胎とは、白土と鉄分を多く含む赤土を練り上げ、自然に乱れる粗い縞模様を作り出す技法です。

丸鞆や帯金具は、腰帯の装飾品で、身分に応じて、銅製のものや石製のものが使い分けられていました。

国家は「和同開珎」をはじめとする銭貨を発行しました。しかし、銭貨の使用はみやこの周辺にとどまり、普及はしませんでした。



絞胎陶枕（八幡市内里八丁遺跡）



丸鞆（京都市長岡京跡）



和同開珎（向日市長岡京跡）

貴族の邸宅 ～長岡京のばあい

桓武天皇（在位 780～804 年）は、延暦 3（784）年にみやこを平城京から長岡京へ遷しました。

右の図は発掘調査の成果から、長岡京のようすを想像して描いた復原図です。

当時の貴族の邸宅は、正殿を中心に、その両脇に脇殿を「コ」字状に配置されたものが多く知られています。



長岡京左京二条三・四坊周辺の想像復原図（村上優美子氏・画）



緑釉唾壺（向日市長岡宮跡）



平安京跡右京三条二坊十六町「齋宮」邸宅跡・「齋宮」墨書土器（京都市）
（京都市・京都市考古資料館提供）



風変わりな土器・唾壺

唾壺は、もともと唾液や痰を吐き入れるための容器のことですが、のちに実用性を失ったようです。緑釉の唾壺も装飾品であった可能性があります。

貴族の邸宅 ～平安京のばあい

延暦 13（794）年、桓武天皇はみやこを平安京に遷します。「齋宮」邸宅跡の調査では、園池を中心にその周囲に建物が広がっているようすが明らかになりました。10 世紀後半ごろのものです。日本風の貴族邸宅の様式とされる「寝殿造」の原形の 1 つではないかと考えられています。

まさに「源氏物語」の時代です。

緑のうつわ

中国では釉薬をかけた陶磁器がたくさん作られ、日本にも輸入されました。唐三彩や青磁と呼ばれるものです。

その鮮やかな色彩に憧れた日本の人々は、日本の技術を用いて奈良三彩や緑釉陶器などを作りました。



中国製青磁碗
（京都市平安京跡）
（京都市考古資料館提供）



緑釉陶器碗
（亀岡市黒岩 1 号窯）



緑色に焼かれた軒瓦（京都市史跡平安宮跡内裏跡豊楽院跡）
（京都市提供）

緑のかわら

平安宮には、内裏をはじめ、さまざまな儀式を行う朝堂院・豊楽殿、役人達が政務を行う官衙などが置かれていました。

その 1 つである豊楽殿では緑色の釉薬をかけた軒瓦がたくさん見つかっています。

仮名文字の誕生

文字の使用

漢字は、「獲加多支鹵大王」銘鉄剣のように古墳時代から使用されますが、これらは渡来人の知識が大きな役割を果たしていたと考えられます。

そして飛鳥時代以降、本格的に使われるようになりました。やがて、律令制のもと、行政に関わる文書にも漢字が使われるようになりました。その一部が木簡です。

また、和歌を書いた木簡なども見つかっています。



万葉仮名
よ み
阿 あ
支 き
波 は
支 き (ぎ)
乃 の
之 し
多 た
波 は (ば)
毛 も
美 み
□ □

万葉仮名

「万葉仮名」は、漢字本来の意味ではなく、漢字1文字の音で、日本語の1音を表していることが大きな特徴です。

万葉仮名は和歌のほか、せんみょう宣命(天皇の命令)などに用いられていました。

土の中から万葉の歌

史跡神雄寺跡で出土した歌木簡は、『万葉集』巻10の2205番の歌「秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ぬれば風を痛みかも」の一部が書かれています。

けり
か
は
な
り
に
い
つ
の
ま
に
わ
す
ら
れ
の
あ
ふ
み
ち
は
ゆ
め
の

積文

讚岐國鶴足郡少領 □



積文

海戸主海八目服部姉虫女米五斗



木簡 (木津川市上狛北遺跡)

積文



和歌を書いた土師器の皿 (京都市平安宮左兵衛府跡) (京都市提供)

歌木簡 (木津川市史跡神雄寺跡)

お	え	う	い	あ	オ	エ	ウ	イ	ア
於	衣	宇	以	安	於	江	宇	伊	阿
於	衣	宇	以	安	於	工	宇	イ	ア
お	え	う	い	あ	オ		ウ		ア
お	え	う	い	あ			ウ		ア

仮名の成立

仮名の誕生

漢字を利用した日本語の表記は、平安時代になると、「仮名」を生み出しました。

漢字をくずして文字を表したものが「ひらがな」に、漢字の一部を使って文字を表したものが「カタカナ」になりました。

今日、私たちが使っている文字の誕生です。

広がる海の道

11～17世紀は、日本の陶磁器が大きく変化した時期です。平安時代から室町時代にかけて、中国を中心に生産された陶磁器が多量に輸入されました。その後、朝鮮半島やベトナムなどの東アジア、さらには南蛮貿易と、貿易のルートは遠くに伸び、また、広がりを見せます。

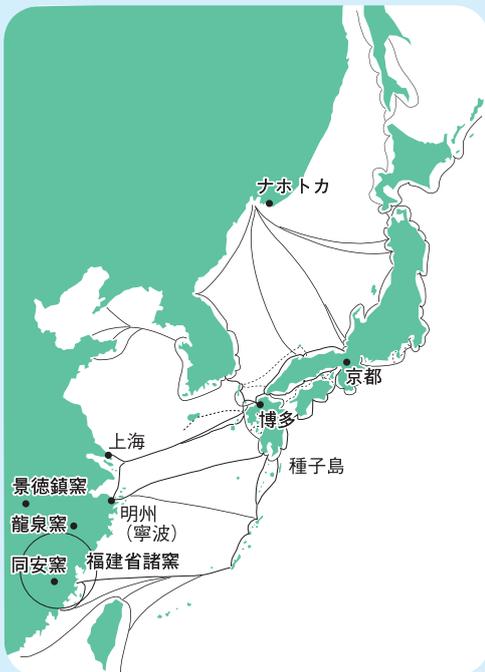
日本人は、海の道の広がりによって得られたさまざまな陶磁器の影響を受け入れ、それをアレンジして、現代につながる多彩な新しい形の器を生み出しました。

貿易とうつわ

日宋貿易

日宋貿易は、日本と中国の宋の間で行われた貿易です。南宋から多量の陶磁器や銭貨がもたらされました。一方、日本からは金・水銀・刀剣や漆器などが輸出されました。平安時代末期には、平氏が独占しようとした。

南宋の船は、明州（寧波）から出港し、日本の博多や大宰府を経由して、摂津の大輪田泊までやってきました。そして、物資は川船に積み替えられ、淀川を遡り、京都へと運ばれたのです。



鎌倉・室町時代の航路と陶磁器の窯
(市村高男「中世の航路と港湾」2010より一部改変)

あおうつわ

中国製青磁は、平安時代末期から大量に輸入されました。当初は、うつわの内面に雲水文や花文をヘラで描いたものでしたが、鎌倉時代になると、いわゆる蓮弁文が流行しました。室町時代には、雷文といわれる四角い渦巻き文様のものもあります。



青磁水注
(京都市平安京跡)



完形で出土した白磁椀
(京田辺市門田遺跡)



白磁合子
(大山崎町松田遺跡)

日明貿易

日明貿易は、足利義満によって始められました。義満は「日本国王」と名乗り、朝貢外交をしました。貿易にあたり「勘合」という貿易許可証を明から与えられたので「勘合貿易」ともいいます。

日明貿易では、日本から刀剣・槍・扇・屏風・銅・硫黄など、中国からは銅銭・生糸・高級織物・陶磁器・書籍・書画などが交易されました。



青磁皿（魚文）
(京都市平安宮跡)



青磁椀（細蓮弁文）
(京丹後市シミズ谷城跡)



青磁椀（雷文）
(南丹市八木城跡)

南蛮貿易

天文12(1543)年、鉄砲が伝来しました。これ以降、ポルトガルやスペインとの、いわゆる南蛮貿易が始まりました。輸入品は鉄砲・火薬・中国の生糸・絹織物などで、日本の銀で交易を行いました。

宣教師もやって来ました。その1人、ルイス・フロイスは、その著作『日本史』の中で、豊臣秀吉が造営した聚楽第とその周辺の大名屋敷の荘厳さに驚いたことを記しています。



南蛮貿易の航路

(出光美術館『陶磁の東西交流』1984より一部改変)



華南三彩盤
(京都市平安京跡)



青花磁器大皿
(京都市平安京跡)

三彩・染付

華南三彩は、緑色や黄色の鉛釉を施した色彩豊かな焼物で、中国南部で生産されました。16世紀末頃の製品です。楽焼の創始者の長次郎も華南三彩盤を模した作品を作っています。

漳州窯青花磁器は、16世紀後半から17世紀にかけて、中国南部で盛んに生産され、日本をはじめ、アジアやヨーロッパなどに輸出されました。日本の磁器にも影響を与えました。

朝鮮半島の陶磁器

室町時代末から安土・桃山時代にかけては、各地に朝鮮王朝の焼物が渡来しています。その中には、茶器に見立てられたものもあります。

白磁椀は16世紀に焼かれたもので、茶椀に見立てられたのでしょうか。

粉青沙器椀は、檜垣文を線刻しており、「彫三島」という茶椀です。日本からの注文品といわれ、17世紀前期頃の製品とみられます。



朝鮮王朝白磁椀
(京都市平安京跡)



朝鮮王朝粉青沙器椀
(京都市平安京跡)



ベトナム陶器壺
(京都市平安京跡)



金箔飾瓦 (京都市聚楽第跡)



「西洋」との遭遇

ヨーロッパの文字が日本に入ってきたのは、大航海時代である16世紀前半、鉄砲伝来以降です。

その中で聚楽第周辺の大名屋敷に葺かれていた金箔瓦の裏側に「Me,s」と書かれたものが見つかっています。当時の京都にアルファベットを書くことができた人がいたことを物語っていますが、一体どのような人だったのでしょか。

安土・桃山時代の華…美濃陶器

室町時代末から安土・桃山時代にかけて美濃では、さまざまな陶器が生産されました。中国製品を模倣した天目碗のほか、灰釉を黄色く発色させた黄瀬戸、白い長石釉を厚く掛けた志野、織部釉と呼ばれる銅緑釉を施した織部などの茶陶です。

その後、織部釉を施さない志野織部という、鉢や皿などの食器が中心の陶器も生産されました。美濃陶器は多彩な器を生み出しました。



美濃天目碗
(京都市平安京跡)



黄瀬戸銅羅鉢
(京都市平安京跡)



織部・唐津沓茶碗
(京都市平安京跡)



青織部向付
(京都市平安京跡)

輸出された肥前陶磁器

肥前陶器(唐津)は16世紀末頃に、肥前磁器(伊万里)は17世紀初頭頃に、朝鮮半島の技術により、佐賀県で生産が始まりました。

磁器は、その後、中国の影響を受けて発展し、17世紀後半には、アジアや中近東、ヨーロッパにも輸出されました。

中国や朝鮮の技術を取り入れ、生産が始まった日本製の磁器が世界に流通するようになったのです。



肥前陶器(絵唐津)大皿
(京都市平安京跡)



肥前磁器(伊万里)染付鉢
(京都市平安京跡)



©金箔瓦(京都市聚楽第跡)

「ひょうげもの」～独自の美意識

古田織部は近世初頭の武将で、茶の湯においては千利休の高弟です。織部陶の生産に係わったとされていますが、確かではありません。織部陶は17世紀初頭頃、美濃で焼成されました。

織部陶には、さまざまな形の向付や、丸い茶碗をわざと歪ませた「沓茶碗」などがあります。茶会で沓茶碗と思われる器を見た茶人は、「ヘウケモノ也」と日記に書き残しています。

天下人の栄華～金箔瓦

聚楽第は、関白になった豊臣秀吉が天正14(1586)年に造営を始め、翌年に完成しました。その後、関白職・聚楽第を譲った甥秀次との関係悪化により、文禄4(1595)年に秀吉によって破却されました。

聚楽第の本丸東堀跡などの調査で、金箔瓦が出土しました。軒瓦や飾瓦に漆で金箔を貼っています。金箔の残りの良い瓦は、今も燦然と輝いています。

聚楽第跡出土金箔瓦は、当時の豊臣政権の権勢を知る上で欠くことのできないものです。

時間旅行ってこんな感じ！

…公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターのしごと…

私たち埋蔵センターの職員は、遺跡が所在する場所で道路や建物の建設など、公共工事が行われる場合、それに先立ち埋蔵文化財の発掘調査を行っています。毎年京都府内各地で発掘調査を行い、その面積は甲子園球場1個分に匹敵します。

土を掘り下げると、建物の柱の穴が見つかったり、土器や瓦の破片が出てきたりします。それらは、遠い昔の人々の暮らしや活動の痕跡です。私たちは、それがいつごろのどのような暮らしや活動だったのかをつぶさに調べます。その場所が埋め戻されても、調査報告書や写真・図面などの記録と、取り出されたもの（遺物）は次の世代へと伝えます。

発掘調査は、私たちが暮らしている土地の歴史をひもとく、ワクワクドキドキの時間旅行です。これからも私たちは、過去をふりかえり、未来につながる良いしごとをしていきたいと考えています。



掘削作業をする作業員



図化作業をする整理員



遺物を検討する調査員



実測作業をする調査補助員



考古学の知識を伝える出前授業

発掘調査は分業です。責任者である調査員を中心に、現地で柱穴や溝などを掘削する作業員、測量や実測をする調査補助員、出土遺物を洗浄したり、実測、復元する整理員から成り立っています。仕事は違っても正確さと緻密さが求められる点は同じです。貴重な文化財を守るために、毎日、責任感と緊張感をもって作業を行っています。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター設立 35 周年記念展覧会

「和魂漢才 - 京都・東アジア交流の考古学 -」展示図録

発行日 2015 年 11 月 28 日

編集・発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 〒617-0002 向日市寺戸町南垣内 40-3

Tel.075-933-3877 Fax.075-922-1189

ホームページアドレス <http://www.kyotofu-maibun.or.jp> 印刷 三星商事印刷株式会社